

第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展  
日本館キュレーター指名コンペティション企画提案書

2018年5月6日

| タイトル | 「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」  
| アーティスト | 下道基行+安野太郎+石倉敏明+能作文徳  
| 企画提案者 | 服部浩之



下道基行《津波石》(2015-)より

## 【背景と概要】

### ・地球という尺度（スケール）を改めて考える

私たち人間は、地上には何百メートルの高層ビルや道路を建造し、地面の下には地下街や地下鉄を敷設し、産業革命以降異常な勢いで地球上に都市生活の場を拡張し続けています。人間存在が地球環境に大きな影響を与え、様々な動植物を絶滅の危機に迫りやる現代の状況を、新たな地質学的時代「人新世」とする議論も2000年以降盛んになっています。しかし、直径12,700kmに及ぶ地球の大きさから考えると、これは薄皮のような表面上での行為にすぎませんし、46億年という地球誕生からの時間と比べると、それは瞬きほどの刹那でしかないことを忘れてはならないでしょう。人間は地球表面のほんのわずかな場所に暮らす、とても小さな存在でもあるのです。

本展は、地球規模のとてつもなく長い時間や空間の広がり、そのなかで生きる人間の存在、そして人と地球や土地との関わりかたに思いを巡らせ、考える場を築くことを目的としています。

### ・災害多発国日本から人と自然の関係を問う

複数のプレートが重なりあう場所に生まれた日本は、地形の変化に富み、豊かな水資源をもちますが、一方で定期的に巨大な地震や水害に襲われる災害の多い土地でもあります。また、土地開発の引き起こす土砂崩れや工場排水による環境汚染などに見られるように、近年の人の活動と自然災害は地球規模で密接に関係しています。この顕著な例が、日本が2011年3月11日に経験した東日本大震災という巨大地震と、大津波による原発事故です。この自然と人為の両災害が引き起こした諸問題は今も収束することなく、多数の人が土地を奪われ、暮らしの場が崩壊したままです。また、この津波で数百の生物が漂流物と共に北米に到達した事実は、「人新世」たる今、災害は国家・文化・生物種を越え、地球上の様々な地域を予期せぬ仕方結びつけることを象徴しています。

こういった現代の状況を踏まえ、この災害多発国日本に暮らす私たちが、地球という生態系における人間存在そのものを改めて問い、人と自然の関係、そして世界の趨勢たりながらも限界や行き詰まりが露呈しはじめている成長志向の資本主義社会を再考し、新たな暮らしのつくり方を真剣に考え、提示していくべきではないでしょうか？

### ・津波石を通して捉える自然の力と人間存在

展覧会は、アーティストの下道基行が沖縄の八重山諸島で出会った「津波石」を起点とします。下道は、2015年の出会いから現在まで数年をかけてリサーチと撮影を重ね、作品《津波石》を制作中です。津波石は、大津波により海底から陸上に運ばれた巨石で、世界各地に散在します。地球の力はこのような巨石をも軽々と移動させてしまいます。何千年も前に地上へと移動されたものもあれば、数百年前の津波により陸地に上ったものもあります。自然の力が海底から地上へと運んだ津波石は、その力の存在を物語るように地面と切り離されてぽつんとそこにあります。災害の記憶を留める自然石の一種でありながら、時には地域の人びとの信仰の対象となり、神話や伝説の一部となり、渡り鳥のコロニーや昆虫の棲家となって、自然と文化が混ざり合った独特の景観を形成してきました。

彼方から現れた「津波石」に長い時間をかけて草木が生え、また部分的に人の手が加えられて周囲に同化していくさまは、環世界的な知覚に基づいた人間と自然の関係を映し出しているようにも感じ

られます。そして人間が自然界から取り出したガラスやアスファルトのような準鉱物も、未来には「人新世」に生み出された特徴的な地質の一部に数えられるかもしれません。

19世紀の半ばにヴェネチアを旅したジョン・ラスキンは、「水の都」であり、また水没の危険性のある「死の町」とも呼ばれるこの町で「ヴェネチアの石」を発見し、その素材を生かしたゴシック様式の高貴なる荒々しさを称えました。現代においてヴェネチアは、しばしば水害に脅かされ、地球温暖化による水位の上昇による水没の危険性に直面しています。このような時代に八重山の「津波石」を出発点に「石と水」の関係を考えることは、人工的な力と自然の力が「入れ子」のように重なり合った新たな生存の条件に考えを巡らせ、地球という惑星の遠く離れた二つの場所で絡み合う、「石と水」の照応関係を浮かび上がらせることになるでしょう。

### ・宇宙の卵について

「Cosmo-Eggs | 宇宙の卵」という概念は、「宇宙卵 (Cosmic-Egg)」からの世界の誕生という神話学における「卵生神話」を元に、人間／非人間の共生や、複数の神話／歴史の共存という主題を喚起させるイメージを孕んでいます。「宇宙卵 (Cosmic-Egg)」は西アフリカ、古代チベット、朝鮮半島、琉球諸島など世界中に伝えられた神話的モチーフですが、世界の原初をあらゆる空間イメージとして鳥類の卵の視覚的の喩を含み、最小限の空間に最大限の潜在力を想起させる人間の普遍的な想像力を概念化しています。本展で扱う「津波石」のひとつは、明和年間の「八重山地震」(1771年)の際に生じた津波の被害を受けた八重山諸島や宮古諸島の陸地に流れ着いた巨石であり、それ自体が歴史的な出来事の記録とともに、ローカルな神話的な記憶によって彩られています。さらに、それ自体が巨大な卵のようにも見えるこれらの石たちは、現在は特にアジサン亜科の鳥類が営巣するコロニーとなり、実際に「鳥の卵」と関連づけられる極小の生態学的空間でもあります。

人間と非人間が共生する極小の公共空間を具体的にイメージすることは、日本館という場所を持つ文明史的な役割を明瞭にするだけでなく、かつてクリストの梱包芸術に対して「宇宙の缶詰」(1964年)を対置した赤瀬川原平のイメージ喚起力を参照し、人間と非人間の共生という現実的なエコロジーの課題に繋ぐものでもあります。さらに「宇宙の卵」が複数形であることによって、「複数の神話／歴史の共存」という現代世界の普遍的な課題が、ユーモアとともに暗示されます。

### 【作家選定について】

#### ・異なる領域の表現者による協働

本展は、分野の異なる表現者の協働により生成される芸術空間を介して、人間の行為と地球の時間の関係、そして生態系の一部としての人間存在を思考する場を築くものです。

数万年前、ラスコーやアルタミラの洞窟などに人類が描いた原初の風景は、そこに音楽や踊り、唄やことばが同時に存在したことを物語っています。これらの壁画は、人間が生態系の一部として動植物と共存していたことを伝えるものでもあるでしょう。近代以降、芸術表現は細分化され、ジャンルごとに発展してきました。しかし地球環境を形成する一要因としての人間存在と地球との関係を思考するには、改めて分化された芸術の再統合が必要だと考えます。また、人間の尺度のみで物事を眺めるのではなく、異なったスケールや視点からの応答が必要不可欠でしょう。

そこで、独自の観察眼と人類学的な視点を携え、美術家としての立場から現代社会の状況にアプローチする下道基行の活動に注目したところ、近年彼がリサーチを重ねる「津波石」の存在が浮上しました。下道は、地質と時間の堆積としての津波石を、広場のようなものに喩えます。ときにそれは人の信仰の対象となり、植物が芽吹き、鳥が巣をつくるなど、集い棲まう空間にもなります。

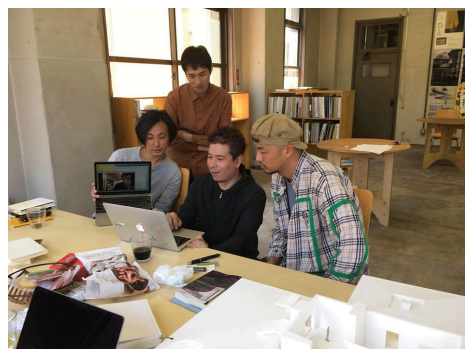
鳥は境界を超えて移動し異なった場所をつなぐ存在であり、カザルスの「鳥の歌」やメシヤンの「鳥のカatalog」を例に出すまでもなく、その声は音楽を想起させます。作曲家安野太郎はリコーダー（笛）の自動演奏により鳥の声を奏でます。自動機械（オートマトン）は人新世の要因となる機械文明を象徴し、それによる鳥の声は機械文明が擬態する自然を表現します。一方で、多種の鳥が人の活動により絶滅危惧に瀕しているのも忘れてはなりません。

石も鳥も、民話や伝承に繰り返し登場します。世界各地に異なった言語で多数の民話や物語が残されていますが、時にそれらは不思議な共通性を備えています。人類学者はある土地に継承される習俗や物語を収集し、過去を手繰りよせることで未来を想像します。神話学や芸術人類学を専門とする石倉敏明は、人と自然の関係を思考するため、石や鳥にまつわる物語を収集していきます。

そして、これらを束ねるのが建築空間です。日本館を単なる展示会場と捉えるのではなく、設計者吉阪隆正の設計意図を汲み取り、インスタレーション空間を形成するフレームと規定し、ひとつの体験の場を生み出します。建築家能作文徳は、既存建築のもつ意味や痕跡を手がかりに様々なリノベーションを手がけてきました。他者とのコラボレーションも多く、ヴェネチア・ビエンナーレ建築展での日本館展示経験を持つ稀有な存在で、本展における協働者として最適の人物といえます。

キュレーターの服部浩之は、アーティスト・イン・レジデンスなど創造の環境を築く現場に長く身を置いた経験を活かし、ヴェネチア・ビエンナーレにおいて新たな出会いと協働のための広場をつくることを試みます。異分野の横断や協働は、言うほど容易には実現しません。本プロジェクトでは、合宿的な旅を重ねることでそれが練り上げられます。今回提案書作成のために行った短い「合宿」を契機に、今後も複数回の滞在制作を軸にひとつの作品を築きあげることが想定しています。また、ひとりの作家が代表するのではなく、集団（コレクティブ）で取り組むこと自体、現代的な表現の新たな試みと言えるでしょう。

一方で、各表現者はあくまでその専門領域において創造に携わります。人間は人の視点や都合で物事を考えがちですが、石には石の世界や時間が、鳥には鳥の領域があるでしょう。表現者たちはそれぞれの言語で、それぞれが背負うものを代弁します。下道はものの視覚的存在を、安野は音楽を、石倉は物語を、そして能作は空間を思考します。各作家はその背後にある異なった技術と思考を媒介し、接続させる存在でもあります。



制作合宿の様子

## ・参加作家について

下道基行は、《戦争のかたち》という日本全国に残る戦争遺構の現在の姿を写真で捉えた作品で2005年にデビューし、その後現在の日本の国境の外側に存在する鳥居を撮影した《torii》のシリーズを約6年かけてつくりあげました。本作を出展した光州ビエンナーレ2012で下道は新人賞を受賞し、国際的にも注目を集めました。また、2011年の震災直後にバイク一台で東北を巡り、ふとした段差や境界をつなぐ人の行為に着目し《bridge》という作品を発表しました。2015年以降は八重山諸島で出会った津波石の取材と撮影を続け新たなシリーズ《津波石》に取り組んでいます。

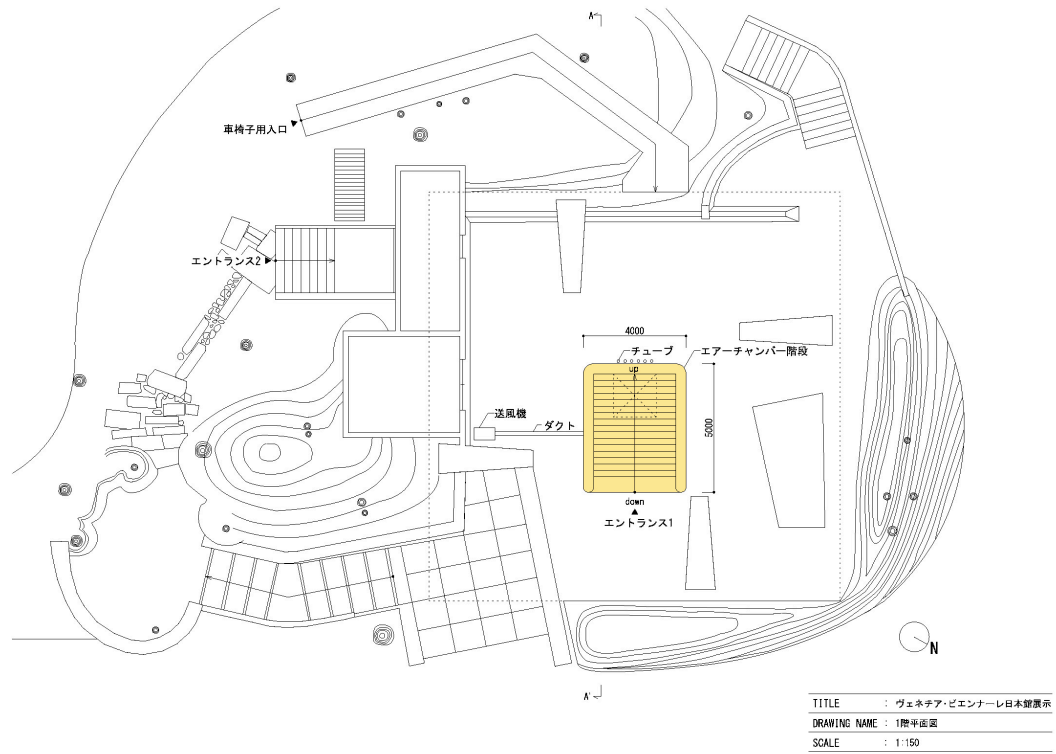
考現学と考古学をつなぐようなユーモアある観察眼や日常感覚と、少し引いた立ち位置から土地と人の関係を問うダイナミックな視点を併せもちます。これまでアジアを中心に国際展などでリサーチやフィールドワークを軸とした作品群を多数発表しており、着実にキャリアを積んでいる作家です。近年は、「新しい骨董」や「旅するリサーチラボラトリー」など個人の作品とは異なる協働プロジェクトも積極的に展開しており、路上観察や日本の反芸術的な系譜を引き継ぐ幅広い活動を展開するアーティストとして、ヴェネチア・ビエンナーレ日本館にて紹介されるべき存在と言えます。

安野太郎は、作曲とメディアアートを学び、現代音楽の作曲家として様々な音楽作品を発表するとともに、小沢剛などのアーティストとのコラボレーションも多数実施しています。代表作の《ゾンビ音楽》は、空気の流れで管楽器が奏でられるという原理に着目し、複数のリコーダーに空気を送り込み、運指を電子制御することで自動演奏を可能にした音楽作品です。《大霊廟》ではリコーダーだけでなく、人の声帯の機構を再現したパーツも加えて、自動演奏する音楽インスタレーションを実現しました。本展では、人がいなくなっても奏でられ続ける未来の音楽のかたちを模索します。

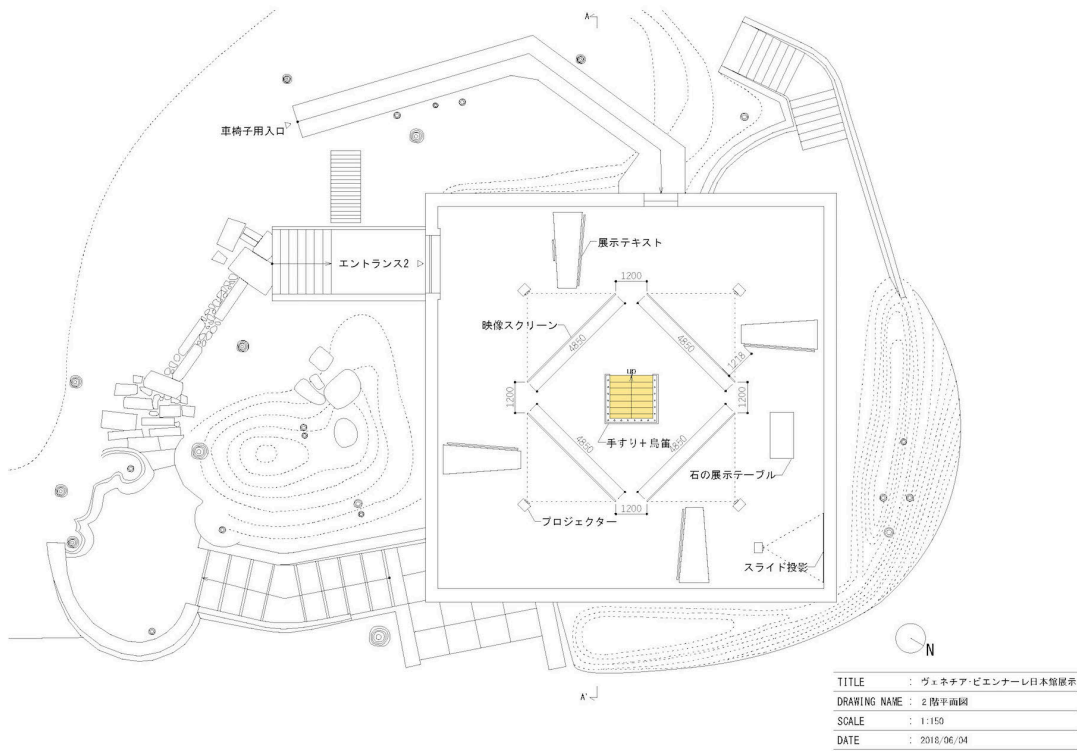
石倉敏明は、神話や宗教の観点から研究を進め、同時に山伏の修行も修めるなど、フィールドとなる土地に深く入り込んで活動する人類学者です。アジアのフィールドワークからスタートし、近年は東北を主な研究対象としています。これまでも、田附勝や鴻池朋子などのアーティストとの協働制作・制作協力を行うなど、人類学と現代芸術という異なった極を結ぶ独自の活動を展開しています。本展では、石と鳥にまつわる神話、民話を収集・再構築し、展示空間における言語体験を構成します。

能作文徳は、《メイド・イン・トーキョー》などで知られる塚本由晴のもとで建築を学びました。ものと人との関係に強い意識をもち、アクター・ネットワーク理論を建築設計に応用しています。純粋な建築デザインのみを追求するのではなく、場の文脈と状況、ものの意味や根拠を読み取り活かすことを大切にしています。弟の建築家・淳平との協働作品《高岡のゲストハウス》では、2階建の既存建築の大屋根を持ち上げ2階部分を取り払い、減築という手法で大胆なりノベーションを実現しました。この作品は2016年のヴェネチア・ビエンナーレ建築展日本館でも紹介されました。この経験を活かし、本展での空間構成を試みます。

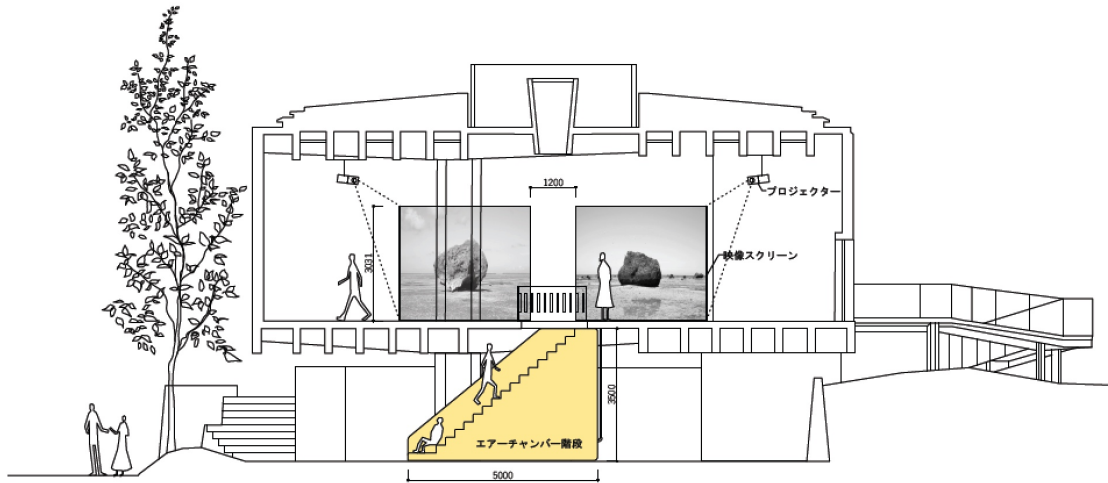
【展示構成について】



一階平面図



二階平面図



TITLE	: ヴェネチア・ビエンナーレ日本館展示
DRAWING NAME	: A-A 断面図
SCALE	: 1:100
DATE	: 2014/06/04

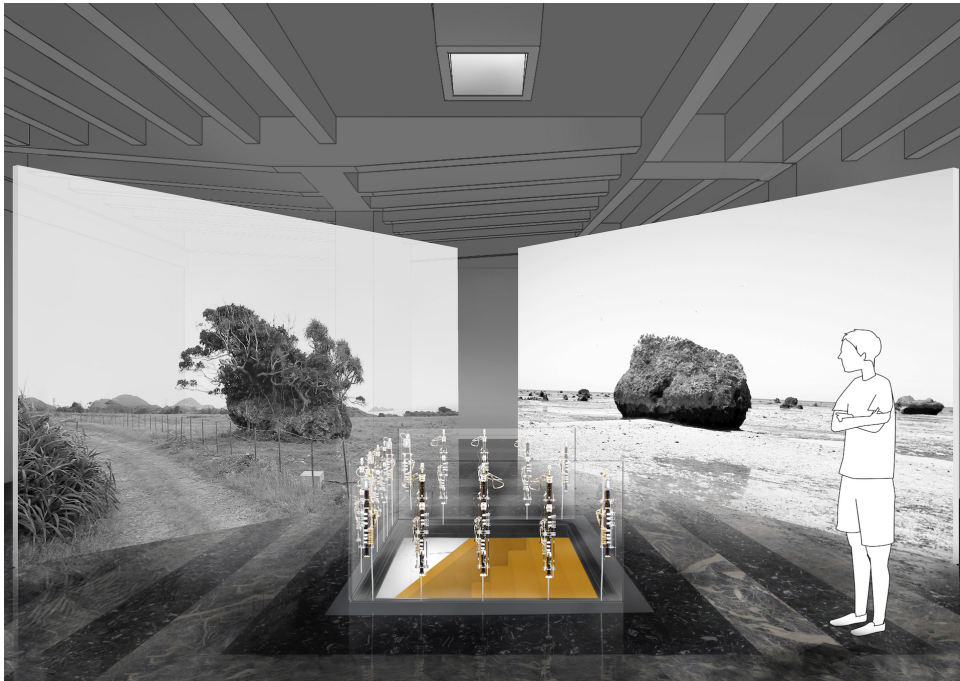
断面図

1) ピロティ部分



ジャルディーニ会場の入り口から通路を進むと日本館はピロティが開けた面が見えてきます。そしてピロティからは、鳥の声のような音が聞こえてきます。その声に誘われて、ピロティ中央に設置された空気で膨らんだビニル製の大きな階段を上ると、手すりに取り付けられたたくさんのリコーダーが現れ、鳥のような歌声が空気圧によって奏でられています。これらは、安野太郎がリコーダーや人工声帯を組み合わせで構築した自動演奏楽器で、「鳥の歌」を奏でるものです。ちなみに、この階段自体が空気をリコーダーへと送り込む風箱としての機能を備えています。

## 2) 上階展示室トップライト下



トップライトからやわらかい自然光が注がれる階段を上ると、鑑賞者は四周を《津波石》の映像に取り囲まれます。幅約4.8メートル、高さ約3メートルの半透明のスクリーンに、各地に散在する津波石を捉えた映像が各面ひとつずつ投影されています。色彩が取り払われたことで、具体的な場所や時間が特定されることなく、どこか身近な場所の記憶に重ねられたり、あるいは遠い別の惑星に落ちた隕石であるかのようにも見えてきます。また、鳥の声だけが周囲で響くのも、なにか不思議な感覚を与えるでしょう。時折この映像の後ろ側を過ぎ行く人の影が重なるなど、不思議な相互作用も起こります。

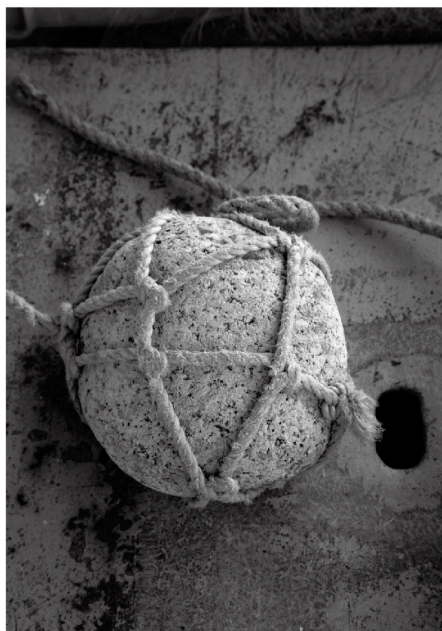
## 3) 上階展示室スクリーン外側





スクリーン脇の隙間を抜けて室内の外側の空間に出ると、内側の凝集された空間とは対照的に、静かに開けた空間へと至ります。スクリーンで囲われた内側からは安野の音楽が響き渡り、まるで津波石自体がひとつの楽器であるかのように体験されることでしょう。映像と音楽は独立したものでありながら、この内と外の境界面を生み出す空間構造を通じて、共鳴し、ひとつの体験へと昇華されます。

また、ほのかに照明で照らされた外側の壁面や柱を眺めると、ことばが浮かび上がってきます。ここには、人類学者の石倉敏明を中心に収集した津波石・渡り鳥・太陽・卵・星・海などにまつわる民話や伝承が、八重山・宮古諸島周辺と世界の他の地域をつなぐ地質学的・生態学的・人類学的知見を再構成したテキストとともに配置されます。



下道基行《新しい石器 / New Stone Tools》

津波石の映像の周囲を巡ると、ある壁面に別の石が小さく映し出されています。海の近くに暮らす人々が石を漁の錘（重り）にしたり、漬物石にしたり、あるいは飾ったりと、石になにか役割や意味を与えたもので、下道はそれらを《新しい石器》と名付け、収集しています。また、その脇の机には冊子で包まれ、縄で縛られた石が置かれています。これは、対馬や韓国南部の島々などの石の浜辺と集落の石を収集した写真集と、そこで拾った石です。「石は今でもただの石であり、それだけでは意味や価値はない……（中略）それぞれの石に価値を与えるのはそれを拾い上げた人間である」と下道は言います。《津波石》という自然の力が運んだ巨石に対して、人間が移動させ意味や価値を付加した《新しい石器》を対置し、物事の意味や価値についても考えを巡らせます。

日本館は、メインエントランスが会場入り口から見て一番奥側にあるため、多くの観客は最初に目にするピロティの階段を上り、作品空間を体験し、メインエントランスから外へ出て行くという流れが

予想されます。もちろん、メインエントランスから入場することを拒むものではありません。スクリーンの内外を往来したり、自由に作品空間を堪能してもらえればと考えています。

最後に建築的な構成に言及すると、日本館の特徴である床に孔が開いている空間を生かして、建物の中にもうひとつ建物があるようにスクリーンを設置することで複雑な内外の関係性を生み出し、

「卵」の殻と白身と黄身という入れ子構造を強調する展示空間になっています。その入れ子状の空間の内部と外部の両方から異なる視点で作品を体験できるようになっています。ピロティ下にある空気圧で膨らませた階段では、ジャルディーニの通りを眺めながら座って休むことができます。

#### 【参考画像】



下道基行《津波石》(2015～)より



安野太郎《大霊廟 I》岐阜県美術館、2017年 写真：池田泰教

## 【予算案】

費目	内訳	金額
旅費	航空券、宿泊（アパートやairbnbを想定）、日当	400万円
作品制作費	ピロティ部分階段一体型作品	400万円
	リサーチ関係費（八重山諸島、台湾、東北ほか）	200万円
会場設営費	四面スクリーンほか制作	500万円
	その他空間造作	300万円
機材費	プロジェクター4台、再生機材、ケーブル等一式	250万円
輸送費	機材、材料など	200万円
現地管理運営費		1,000万円
広報費		300万円
カタログ作成・記録費		250万円
修繕費		100万円
予備費		100万円
合計		4,000万円

\*その他必要に応じて協賛などを募る。

## 【作家主要略歴】

### 下道基行（したみち もとゆき | 美術家）

1978年 岡山県生まれ、愛知県拠点

2001年 武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業

#### 個展

2016年 「風景に耳を澄ますこと」黒部市美術館、富山

2015年 「ははのふた」豊田市美術館ライブラリー、愛知

#### グループ展

2017年 「ESCAPE from the SEA」マレーシア国立美術館、Art Printing Works、マレーシア

2016年 「岡山芸術交流2016」岡山

2015年 「他人の時間」東京都現代美術館、東京／国立国際美術館、大阪

2013年 「あいちトリエンナーレ2013」愛知

2013年 「Asian Art Biennial 2013」国立台湾美術館、台中、台湾

2012年 「光州ビエンナーレ2012」光州、韓国

#### 受賞歴

2015年 さがみはら写真新人奨励賞

2012年 光州ビエンナーレ2012 NOON 芸術賞（新人賞）

#### コレクション

KADIST（サンフランシスコ、アメリカ）

豊田市美術館  
広島市現代美術館  
森美術館  
国立国際美術館  
岡山県立美術館

### **安野太郎（やすの たろう | 作曲家）**

1979年 東京都生まれ、埼玉県拠点  
2002年 東京音楽大学作曲専攻卒業  
2004年 情報科学芸術大学院大学（IAMAS）終了

#### 職歴

2008年-2010年 東京藝術大学音楽環境創造科 教育研究助手  
2010年-2011年 東京藝術大学芸術情報センター 非常勤講師  
2010年-現在 日本大学芸術学部 非常勤講師  
2017年-現在 東京造形大学 非常勤講師

#### 個展・ソロコンサート

2017年 「「大霊廟 II」-デッドパフォーマンス」BankART、横浜  
2014年 「死の舞踏」京都芸術センター、京都

#### グループ展・フェスティバル

2017年 「Radio Azja」Teatr Powszechny, ポーランド  
2017年 「ぎふ清流の国芸術祭 Art Award In the Cube 2017」岐阜県美術館  
2016年 「Our Masters 土方巽／異言」Asia Culture Center、韓国  
2015年 「ゾンビオペラ「死の舞踏」」Festival/Tokyo、東京

#### 受賞歴

2018年 KDCC2017 奨励賞  
2017年 清流の国ぎふ芸術祭 Art Award In the CUBE 2017 高橋源一郎賞  
2013年 第7回JFC作曲賞第1位

### **能作文徳（のうさく ふみのり | 建築家、東京電機大学未来科学部建築学科准教授）**

1982年 富山県生まれ、東京都拠点  
2012年 東京工業大学大学院建築学専攻博士課程修了、博士（工学）取得

#### 職歴

2018年-現在 東京電機大学未来科学部建築学科准教授  
2012年-2018年 東京工業大学建築学系助教  
2010年-現在 能作文徳建築設計事務所  
2008年 Njiric+Arhitekti（クロアチア）

#### 作品

2017年-現在 「西大井のあな 都市のワイルド・エコロジー」東京

2017年 「Bamboo Theater」 ヴァルガス美術館、フィリピン

2015年 「高岡のゲストハウス」 富山

2012年 「Steel House」 東京

2010年 「ホールのある住宅」 東京

#### 受賞歴

2017年 SDレビュー2017 入選

2016年 第15回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館展示特別表彰

2013年 SDレビュー2013 鹿島賞

2010年 東京建築士会住宅建築賞

### **石倉敏明（いしくら としあき | 人類学者、秋田公立美術大学美術学部 准教授）**

1974年 東京都生まれ、秋田県拠点

2010年 中央大学総合政策研究科博士後期課程単位取得後退学

#### 職歴

2017年-現在 秋田公立美術大学美術学部 准教授

2013年-2017年 秋田公立美術大学美術学部 専任講師

2011年-現在 明治大学野生の科学研究所研究員

2009年-2011年 多摩美術大学芸術人類学研究所助手

#### 共著

2018年 「Lexicon 現代人類学」 奥野克巳共編、以文社

2016年 「どうぶつのことば 根源的暴力を超えて」 鴻池朋子共著、羽鳥書店

2015年 「野生めぐり 列島神話をめぐる12の旅」 田附勝共著、淡交社、2015年

#### **【キュレーター略歴】**

### **服部浩之（はっとり ひろゆき | インディペンデント・キュレーター）**

1978年 愛知県生まれ、同地拠点

2006年 早稲田大学大学院理工学研究科修了（建築学）

#### 職歴

2017年-現在 秋田公立美術大学大学院 准教授

2009年-2016年 青森公立大学国際芸術センター青森[ACAC] 学芸員

2006年-2009年 秋吉台国際芸術村 主事（事業企画担当）

#### 企画した展覧会

2018年 「近くへの遠回り」 Centro de Arte Contemporáneo Wifredo Lam、ハバナ、キューバ

2017年 田村友一郎 | 服部浩之「試論：栄光と終末、もしくはその週末」 小山市立車屋美術館、栃木

2017年 「ESCAPE from the SEA」 マレーシア国立美術館、Art Printing Works、マレーシア

2016年-現在 「アッセンブリッジ・ナゴヤ」 港まちポットラックビルディングほか、愛知

2016年 「あいちトリエンナーレ2016：虹のキャラバンサライ」 愛知県美術館ほか、愛知

2013年-2014年 「MEDIA/ART KITCHEN」 ジャカルタ、クアラルンプール、マニラ、バンコク、青森

2013年 「十和田奥入瀬芸術祭：この惑星の、時間旅行へ」 十和田市現代美術館、奥入瀬地域、青森

2011年-2012年 「再考現学」 国際芸術センター青森[ACAC]ほか、青森

その他

2017年-現在 アートラボあいち ディレクター

2016年 アーカスプロジェクト ゲストキュレーター

2015、2017年 日産アートアワード推薦委員